

『地方創生、関西からの提言』

同志社女子大学 3年 和田愛子

近年日本では地域の過疎化を防ごうと地域創生を掲げ、政府だけでなく各自治体でもさまざまな政策を模索している。しかし、未だに効果的なものは出ていないように思える。有効な政策を考えるには、政府や自治体の視点からみるだけではなく、現地の視点、都市からの視点、また互いの需要と供給など様々な角度からアプローチして行く必要があるだろう。

「地方には就職先がない。だから都市で就職するのは当たり前だ。」それが私の固定観念だった。だから地方からたくさんの学生が上京し、そのまま就職するのだと思っていた。しかし実際自分が大学生になり、事実は違うということに気付いた。地方から上京してきた多くの子が実家へ帰るつもりだという。そして多くの子が「やっぱり地元が好き」というのだ。東京の友達でも「東京で就職するつもりだが、将来的には田舎でゆっくり暮らしたい」という子は少なくない。こういう話を聞いていると、今まで私たちが持っていた「若者は上京し、そのまま都市で働く」という勝手な固定観念は、案外そうではないと思える。私たちが思っている以上に現代の人々は「地方進出思考」なのではないか。

就職氷河期と呼ばれる時期も過ぎ、近年では就職率は徐々に上がってきた。多くの学生が無事就職することができるようになったようだが、果たして彼らは本当にやりたいことがやれているのだろうか。平成 26 年に厚生労働省が発表した平成 23 年に大学を卒業したうち 3 年間で離職した学生の割合を見てみると、大卒、短大卒、高卒すべての年代で 3 割以上が退職しているのだ。せつかく苦労して入った企業をやめてしまうのはなぜなのだろうか。それは彼らの感じる幸福感の低さにあったのではないかと思う。

人間は人から認めてもらい、「自分が必要とされている感覚」がなければどんなにいい給料をもらっていたとしても働き続けるのは難しい。働き続けたとしても、幸福感がなければストレスばかりたまってしまう。大手企業に入れば親も喜ぶだろうし将来安泰かもしれないが、それで本当に幸福感、満足感、充実感を得ることができるのだろうか。

社会で幸福感を必要とするのは働いている人だけでなく、すべての年代の人に言えることだ。例えば、「高齢者」と聞けば私たちは「社会的弱者」と思いがちかもしれないが、それは全くの偏見である。彼らこそ生きた知恵であり、教えを乞うべき日本の財産である。彼らは「高齢者」と呼ぶには失礼なほど元気があり、その知恵や経験を眠らせておくのはもったいない。私は地域エコノミストである藻谷浩介氏の言葉を借りて、彼らを「光齢者」と呼びたい。彼ら「光齢者」もまた、社会に必要とされていると実感することで、より幸福感を得られるのではないだろうか。

「地方進出思考」の都会に住む人々とまだまだ元気だが社会のどこかで燻っている光齢者。

私は今日本に必要なのはこの両者が出会える場所であると考え。農業をしたい、レストランを開きたい、地方で暮らしたいなど様々な希望に応じてワークショップを開き実際に地で交流してもらおうのだ。そこで特産物の育て方を地元の人に教えてもらいながら実際に一緒に栽培したり、その特産物を使ったレシピを教えてもらったりする。そうすれば参加者により興味をもってもらえることができるし、地元の人でも外から来た人と交流できる。なにより年代問わず、友達同士でも家族でも参加できるし、最初は一回参加するだけと思っても、これをきっかけに自分が本当にやりたいことを発見できるかもしれない。また意外と外部からきた人のほうがその土地の良いところを発見できるのではないだろうか。東京でサラリーマンをしていた人が、都会を離れ海辺の近くにジャム屋さんを開いた話を聞いたことがある。彼は旅行でその土地を訪れた際、その特産物である柑橘類が不格好なため安値で取引されていると知り、それを使ってなにか作れないかと考えたそう。そこで特産品の柑橘類を使ってジャムを作り、眺めのいい海辺にお店を建てたところ地元の人にも旅行者にも人気の名店になった。このように他県からきた人に地元の人と交流してもらい、その地域の良さを発見してもらうことで地方再発見の可能性は大きくなるのではないかと。

関西は大手金融機関の三井住友銀行や三菱東京 UFJ、世界的ゲームメーカーの任天堂、女性下着メーカーのワコールなど多くの大企業を輩出してきた。中でも日本の大手食料品会社サントリーの創始者である鳥井信治郎氏の「やってみなはれ」という言葉は、これら多くの企業を輩出してきた関西を象徴した言葉ではないだろうか。私はぜひこの「やってみなはれ」精神を関西から発信し、人と人をつなげる架け橋になってほしいと思う。この精神を持つことで、必ずだれもが幸福感・充実感・満足感を得られる居場所を見つけられると信じている。